

ローマ書略解

目次

前書き

導入と展望

一章 1-17 節 使徒職と福音

一章 18 節-三章 20 節 福音——人間への神の有罪判決としての——

三章 21 節-四章 25 節 福音——信じる者たちへの神的義認としての——

五章 1-21 節 福音——神との人間の和解としての——

六章 1-23 節 福音——人間の聖化としての——

七章 1-25 節 福音——人間の解放としての——

八章 1-39 節 福音——神の律法の樹立としての——

九章 1 節-11 章 36 節 福音——ユダヤ人のもとの——

一二章 1 節-一五章 13 節 福音——キリスト者のもとの——

一五章 14 節-一六章 27 節 使徒と教会

前書き

この『ローマ書略解』は、一九一八年および一九二一年の『ローマ書』のヨリ小さく年若い（もっともその間すでに年輩にもなってしまった）弟である。本略解は、一九四〇年／四一年冬、バーゼルでなされた市民講座の講義の原稿として成立した。読者が本略解から、われわれもまたここであの数年の間に経験した独特の緊張に気づかれることはほとんどないであろう。事の性質上一回限りのことがここで言及されてもよいかもしれない。それは、私がこの講義の内のいくつかの分を（八章に関する数回分の講義だったと思う）、「武装した補充予備役勤務」の一人の男¹の、風雨にさらされていささか変質した制服を着て行なった、ということである。それ以外の点では、私は、かつての一九三三年のボンでのように、今やいよいよもって本題を離れないようにしようと——つまり、「あたかも何事も起こらなかったかのように」——かなり固く心に決めていた。それ以降、当該原稿は様々な写しにおいて存在することになった。それを印刷したいとの無理な要求に対して、今に至るまで私は反対し続けてきた。その叫びがあまりにも切実に私に迫ってきたので、私は自らの懸念を引っ込めることにした。ここにあるのは、それゆえ、望まれたものである。

これは本当にローマ書の略解である。読者は多くの個所で、他の注解書から補足する必要性に迫られるであろう。ローマ書についての更に詳細なものを私から読みたい方は、依然としてあの年上の本〔＝『ローマ書講解』〕か、そうでなければ、私の後期の著作、特に『教会教義学』を手にとらねばならないだろう。何と云っても、このテキスト〔＝ローマ書〕が私の内で引き続き発酵し続けてきたことは言うまでもない。読者は、少なくとも幾つかの比較的大きな段落における

¹ バルト自身のこと。

脚注²で、他のところで継続された、このテキストにヨリ適切に応じようとする私の試みへの指示を見出されるだろう。そこで指示された個所を読まれたならば、本書で提出されているもののうちの多くがやはりまたすでに古くなっているのを見られるであろう。ローマ書を学び尽くすなどということはまさにない。この意味においてローマ書は依然としてなお「待っている」（一九一八年の序文でいささか意気揚々と表現したように）——確かにこの私をも！

この本の、あの年上の本もしくはあれら二つの年上の本〔＝『ローマ書初版』と『ローマ書第二版』〕に対する関係については、語学的・方法的・内容的観点において多くのことが語られうるだろう。ここではあの当時の叙述の何らかの抜粋がなされているのでは決してない、ということは一見してお分かりいただけよう。私は、こうしたことについてあれこれの書評者からなにがしかのことを聞かされることになろう、と予想している。それに対して私自身が述べるような意見は、かれら書評者に対しても読者に対しても〔この際〕免除しておこう。私の意図は、いずれの場合においても——そしてそれは、私がいつか再びローマ書について何か語るとして、そうした将来においても同じであり続けるはずだが——、パウロ自身をして語らしめる、ということだった。「私がパウロを理解するかぎりにおいて」という留保を伴う付記をいかなる注解者も無視することはできず、私もまたできない。私の希望は、かつて今もこうである。すなわち、依然としてなお——そして繰り返し繰り返し——不十分な注解という媒体を通してであっても、彼自ら〔の語るところ〕を聴かしめるのにパウロが十分に力強くある、ということである。

ここで最後に注記すべきことは、当時、私は、この講義の聴講者の中のギリシャ語を知らない方々に対しては、〔聖書の〕何らかの現代語訳（ヴァイツゼッカー、シュラッター、チューリッヒ聖書、メンゲ）を手にしつつ私の説明についてくるよう求めた、ということである。残念ながら、本書の読者に対して、テキスト全体を——今日私がドイツ語に翻訳したいと願っているような具合に——忠実に同時に読み易い形で提供する時間が私にはない。そこで、私は本書の読者にも、どうかこれを読まれる際には、先の諸訳のいずれか一つを、場合によっては一九一八年と一九二一年の私自身の翻訳をも——それをここに翻刻しようとは思わないが——、傍らに置かれるようお願いしなければならない。

バーゼル 一九五六年二月

導入と展望

ローマ書は事実一通の手紙であり、厳密に言えば、ローマにあるキリスト教会³宛ての一通の回状である。それは、使徒行伝および他の同様の一連の回状に基づいてわれわれには周知の使徒

² すなわち、五 12-21、第七章、八 17-27、八 28-39、第九～十一章、第十二～十五章それぞれの脚注（その際、「原注」と表記する）を参照。

³ 以下、ローマ教会を指す場合の「教会」は **Gemeinde** が用いられるので、一々ルビは振らない。それ以外の語（**Kirche**）が用いられる場合には、「キルヒェ」とルビを振ることにする。

パウロによって、ギリシャ語で書かれたものである。彼がローマ書を紀元五八年⁴にコリントで書いた——というよりはむしろ（一六 22）テルティオなる者に筆記させた——ということ、また、ローマ書が、一六1で言及されている教会の姉妹フェベによって、コリントからローマにもたらされたということ、こうしたことを受け入れる幾つかの根拠が存在する。それゆえ、ローマ書は、テサロニケ両書、ガラテヤ書、コリント両書より後の時期に由来するものであり——新約聖書ではローマ書はそれらより前に置かれているわけだが——、他方、新約聖書でパウロの名のもとに含まれている他のすべての文書よりは古いものなのである。

われわれは、ローマのキリスト教会が、誰によって・いつ・いかなる事情のもとで創立することになったのか、については知らない。一 6 から推測できるのは、この教会の大半の者がかつては異邦人であり、しかも、一六章の挨拶のリストによると、その少なからぬ者が元々はローマ帝国東部を故郷としていた、ということである。手紙の内容全体から明らかになるのは、旧約聖書が（新約聖書は実にまだ存在してはいなかった！）この教会では熱心に読まれていた、ということであり、そして、その正しい解釈がこの教会にとっては或る真剣な問題を成していた、ということである。そのことは、ローマのユダヤ教徒の会堂^{シナゴグ}の存在によって喚起された諸問題と関連している可能性があるし、もしかしたら、当時、キリスト教会⁵が存在していた場所の至る所で、かつて〔ユダヤ教徒だった〕ユダヤ人キリスト者⁶の間での或る種の傾向によって投げかけられていた諸問題とも関連している可能性がある。

使徒が、ローマのキリスト者について、《かれらの信仰は全世界において周知の事柄である》と語り（一 8⁶）、また、どんなに長い間かれらを訪問したいと願ってきたか、ということをおくも切実な仕方でも語るとき（10 節以下）、それは、この教会に、次の理由で帰されていた重要性を指し示すものだ。その理由とは端的に、この教会が、帝国の首都にして世界の首都〔たるローマ〕にその場所を得ており、それによって、ローマの教会^{キルヒエ}が、続く数世紀の間に獲得し今日に至るまで保持してきたところの、あの重要な地位のなにかがすでに得ていた、というものである。もしもペテロが——カトリックの伝承が、幾人かの名だたるプロテスタント研究者らにも支持されつつ、主張するように——、後にはローマにいて、そこで処刑された〔六四年頃？〕のだとすれば、われわれは、このパウロの手紙において、いずれにせよ、かの地の教会の歴史の更に一層古い記録と関わっているのである。しかしながら、パウロが、ローマそのものから書かれることになった〔ローマ書〕より後期の幾つかの手紙（たとえばフィリピ書⁷）では、少なくとも非常に控え目な仕方でもこの地のキリスト教的環境について書いていたということ、そしてまた、ペテロがローマにいたことについては、これらの手紙においてもまた〔ローマ書同様〕依然としていかに

4 「五五年末から五六年春にかけて（あるいは、パウロの年譜の計算に応じて、五七年末から五八年春にかけて）」（田川訳、第四巻、七八二頁）。

5 ここは **Gemeinde**（すなわち各個教会）の複数形。

6 原文は「一 5」と誤記されている。

7 「未決拘留」のため「パウロがローマに到着したのはほぼ確かに五九年ないし多分六〇年であるから、そして、この手紙〔フィリピ書〕は到着直後ではありえないから、書かれたのは早くても六〇年、しかし多分六一年ないし六二年（もしかすると六三年？）である」（田川訳、第四巻、七九二・七九三頁）。

なる痕跡も認めることができないということ、——こうしたこともまた注記されてよいだろう。ついでながら、ローマ教会の内的生を脅かした誘惑者どもに対する、かなり辛辣ではあるがあまり詳しくは説明されていない警告が、すでにこの手紙の末尾にはある（一六 17-20）。

何のためにパウロはこの手紙を書いたのか。われわれが一五 22 以下から知るの、パウロが、エルサレムの原始教会支援のための献金——これについては第Ⅱコリント書で詳細に語られている——を手渡すために、マケドニアとギリシャからエルサレムへと向かう旅の途上にある、ということだ。彼は、帝国東部における自らの課題は果たされたと見なすことによって（一五 19、23）、今後はローマを経てスペインへと旅し、その地で自らの伝道の業を続けたいと願っているのである。

パウロは、評判によれば、当時のキリスト教界全体においてよく知られた男だった。がしかし、彼自身かつて書いたように（Ⅱコリント六 8）、それは、「誉れと恥辱のもとで、好評と悪評を通して」、であった。彼は多くの敵を持っていた。それも、ユダヤ人や異邦人の間にだけではなく、キリスト教会そのものの中にすらもだった。彼は、その語った内容によって、そして、たしかに特に、それを語った——もしくは書いたり筆記させたりした——仕方においても、^{くみ}与しやすい相手でなかったのみならず、多くの善良な——また、それほど善良ではない——キリスト者にとっては正真正銘の躓きであった。そしてまた彼は、疑いもなく、必要と見なした場合には——しかもそれは稀ではなかった——その至るところで、十分に意識した上で、自ら攻撃したのでもあった。何を巡り、また、どのようにして、彼は抗弁せねばならなかったのか、ということ、われわれは例えばガラテヤ書において強力な仕方で見ると。そしてまた逆に、どのように人が彼を批判したか、ということ、われわれは——それがまったく友好的に起こった場合には——第Ⅱペテロ三 15 以下で、もしかしたら幾分微笑みながら、読むことができる。

さて、大いに否認されかつ自らも戦うこの男が、ローマへ旅することを目論んだことによって、彼は、その地のキリスト者たちに自らのことを知らせることが必要かつ正しいと見なしたのである。かれらが彼自身を通して知るべきなのは、彼が個人的に誰でありどのような人物か、などということではない。そうではなく、彼の職務と彼の使信とは何なのか、ということである。かれらは、かれら自身を——そしてかれらをのみならず——当時明らかに動かしているところの問い、すなわち旧約聖書の正しい解釈⁸を巡る問いへと明確に先鋭化しつつなされた福音に関する彼の叙述において、彼と知り合いになるべきなのだ。それは、彼自身の人生においても大いなるテーマだった。つまり、ユダヤ教の律法学者だったがキリスト教の伝道者となった男の人生においても。そしてそれは、彼が^{キルヒエ}教会で惹き起こしかつ打ち勝たねばならなかった様々な闘いもまたそこを巡っていたまさにそのテーマ、だった。その意味で、それは紛れもなくまさに打つつけのテーマだった。彼自身のことを、いや、彼自身のことをではなく、彼の事柄を、それまでは彼をただ遠くからしか知らなかった人々、また、彼に関して流布していた報告や噂に基づいてしか知らなかった人々、——そのような人々に知らしめるためには、まさに打つつけのテーマだった。この手紙を書くに際しての彼の期待とは、明らかに、このテーマに関する詳細な発言が、ローマ

⁸ 下線部分は、原文における強調（斜字体）である。（以下同じ。）

の教会における自らの最善の紹介——帝国の西部における自分の更なる意図の実現のために彼が必要とした紹介——となるであろう、ということだった。

われわれは、彼の期待がどの程度実現したのか、ということについては知らない。そう、その後パウロは、予期していたのとは全く違った仕方でもローマにやって来たのだった。すなわち、囚人として。だが、先の〔ローマの教会における自らの最善の紹介を目指す〕意図こそがローマ書の動機であった。

そして、これによって今や、ローマ書の内容に関する確かに決定的なこともまた語られている。

ローマ書は、しばしば教理問答に、いやそれどころか教義学にすらなぞらえられてきた。そしてまた事実、ローマ書は、福音主義教会の最初の教義学者である Ph・メランヒトンによって、教義学の著作のための導きの糸として利用されもしたのだった。そうした印象の正しさは、ローマ書が、事実、新約聖書の他のすべての文書より一層多く教えを含み、キリスト教信仰のまとまりある叙述を展開している、という点にある。

だが、注意せねばならないのは、ローマ書は、教理問答や教義学から、それ自身があの（たとえ——特にこの手紙の末尾部分では——必ずしも保持されているわけではないが、しかし全体として実際きわめて明確に現われている）特別な目標を持っている、という点で区別されている、ということだ。この特別な目標を、ルターは、この手紙への序文において大いに的確にこう述べたのだった。「それゆえ、聖パウロは、この書簡において、キリスト教的・福音主義的な教え全体を簡潔に記そうと、また、旧約聖書全体への入り口を提供しようと欲しているかのようなものである。というのも、この書簡をしっかりと心に抱いている者は旧約聖書の光と力とを自らのもとに持っている、ということは疑いないからである。それゆえ、各々のキリスト者はこの書簡に親しみ、そして、絶えずこれに習熟するようにせよ」⁹。さてしかし、こうした目標は、この手紙で起こっているようなキリスト教的教説の展開が、教理問答や教義学に必然的に固有のあの外面的完全性を実際持たない、という結果をもたらすのである。

しかし、そうしたことはともかくとして、ローマ書の内容は、最も簡潔な諸特徴においてスケッチするなら、以下のとおりである。

⁹ 『宗教改革著作集 4 ルターとその周辺』教文館、二〇〇三年、一二八 - 一二九頁（徳善義和訳）も参照。